

(別紙様式＝小学校用)

都道府県番号	9
都道府県名	栃木県

【 ① ② ③ 】

*重点をおいた観点にチェックすること

I 学校名及び規模

学校名	石橋町立石橋小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	3	3	3	2	20	27
児童数	98	99	118	89	115	95	7	621	

II 研究の概要

(1) 研究主題

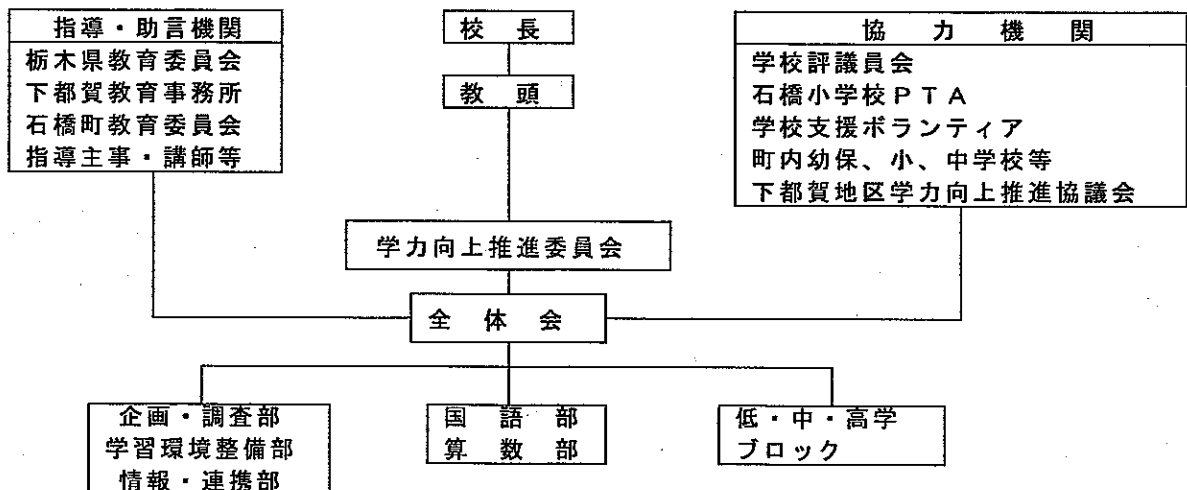
「わかる・できる」喜びや楽しさを実感できる学びの創造
 －基礎学力の向上を図り、学ぶ力を育てる学習指導の工夫－

(2) 研究主題設定の趣旨

- 1 学習指導要領を踏まえて
 学習指導要領が目指す「生きる力」の育成を各教科・領域等の確実な指導により実現させていきたい。
- 2 今日的な課題から
 児童の学力の低下、学習離れなどの不安が一扫できるように、学校全体で取り組み、確かな学力を付けさせたい。
- 3 「学びのすすめ」や今までの研究から
 確かな学力の向上に向けて、更に、学力向上フロンティアスクールとしての研究を深めていきたい。
- 4 児童の実態から
 基礎学力が十分に身に付き、自ら課題を見つけ意欲的に学習できる児童を更に増やしていきたい。
- 5 教師の願いから
 ・個に応じた指導を目指して、一人一人に応じた指導を充実させたい。
 ・確かな評価を行い、指導に役立て、児童の学力の向上を図りたい。
 以上の点を踏まえ、「わかる・できる」喜びや楽しさ、成就感を味わわせたいと考えた。

III 研究の概要（選択した観点を中心に記述すること）

(1) 研究推進体制の工夫



(2) 研究の実際

- ① 発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発
- ア 算数科 「数と計算」の領域の全学年の学習内容を系統化させた問題プリントの作成
 - イ 算数科 各学年の発展的、補充的な学習で使うワークシートの作成
 - ウ 算数科 パソコンで簡単に計算のプリントを作成できる教材の作成
 - エ 算数科 学年に応じたノートの書き方、計算の仕方、用具の使い方、算数用語集の作成
 - オ 国語科 各学年の基礎・基本を身に付けるための「国語おたすけブック」の作成（原稿用紙の書き方、推敲の仕方、ノートの書き方、音読の仕方など）
 - カ 国語科 学習で活用できるプロジェクト教材の作成

② 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善

- ア 児童一人一人の実態の把握………単元ごとの児童の興味・関心、既習内容の定着度
- イ 全クラスでのT・Tによる授業……少人数指導，習熟度別学習
特に算数科の学習での、基礎的・基本的内容の確実な定着と児童一人一人の個性の伸長を図るために、上記のような指導によるきめ細かな指導を行ってきた。さらに、算数科を中心にした習熟度別学習では、次のように実践してきた。
- 1クラスを2グループに分割
 - 事前テストの後，児童が選択したグループで2教室に分かれ，それぞれの教師が習熟度に合わせて指導する。
 - 1時間の授業の中で，一斉指導の後，児童が選択した「ゆっくり進むグループ」と「どんどん進むグループ」等に分かれて学習する。教師（担任＋T・T教員）はそれぞれのグループにつき指導する。
 - 等質に少人数に分け（生活グループ，席順などで），その中を更に「じっくり進むコース」と「どんどん進むコース」に分けて，それぞれの児童の実態に応じて手立てを工夫して指導する。
 - 学年3クラスを4グループに分割
 - 事前テストの後，児童が選択したグループで4教室に分かれ，それぞれの教師（担任3人＋T・T教員）が習熟度に合わせて指導する。
 - 1時間に進める学習の目標を同じにし，単元の中でグループ（コース）を変えることができることとする。また，クラスを分ける際には，児童の希望や意欲を尊重し，家庭と相談しながらコースを選択させる。
 - これらをの指導の工夫を参考に国語でもT・Tや少人数指導の授業を取り入れる。

③ 児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善

ア 評価計画の作成と見直し

学習指導要領に基づいた使いやすい指導計画を作成した。次に，指導と評価の一体化を図るために，指導計画のなかに評価計画を盛り込んだ。「評価のための評価」に陥ることのないよう，無理のない実践可能な評価計画を作成するように配慮した。指導を行った後に修正や加筆を加え，更に見直して改善を図っている。

イ 評価方法の工夫

(ア) 単位時間の評価について

1単位時間という限られた中で，確かな評価をしていくために，次のようなことに気を付けている。また，どのように評価していくか，教科の特質に応じて検討し工夫した。

- | |
|---|
| ① 単元の指導計画に基づいて，評価の観点を明確にする。
(単元を通してすべての観点で評価する。) |
| ② 多様な評価資料や評価情報で評価する。
(担任とT・T教員の連携で，児童を様々な角度から見取る。) |
| ③ 評価を行う時期や方法を工夫する。
(どのような活動で，何で，どのように評価するか工夫する。) |
| ④ 単元を通して全員を見取る。
(1単位時間では全員を見取ることが難しい場合もあるので) |

(イ) 単元の評価について

1単位時間の評価を単元を通して，指導のためにどのように活用していったらよいか検討した。

- | |
|---|
| ① 単元の目標，評価規準，1単位時間の具体的評価規準を明確にし，それらを基に単元の指導計画を作成する。 |
|---|

- ② 単元の目標、評価規準を基に、毎時間の評価情報から、児童の学習状況が的確に把握できるような記録を残す。(評価チェックリストの活用を図る。)

このような点に気を付けて、指導計画を立て、指導に役立つ評価情報を蓄積させるために、評価チェックリスト(評価補助簿)を工夫することにした。

(ウ) 自己評価、相互評価等の工夫

「振り返りカード」を活用し、自己評価や相互評価を行い、児童が学習を振り返り成果を確認するとともに、目的意識を持って学習に取り組めるようにする。教師は児童の反省などからつまづきなどを把握することができるので、個に応じた指導に役立てることができる。

(エ) 評価情報の蓄積

毎時間の評価情報を記録し、その後、評価計画に従って情報を整理し評価補助簿に記入してきた。記録された評価情報は、補充的な学習や発展的な学習に生かしたり、単元の総括評価に活用したりしている。

本校では、評価情報を集約し、指導や評定に活用することができるように、「評価チェックリスト」(評価補助簿)を作成し活用している。

ウ 目標と指導と評価の一体化をイメージした授業の実践

児童が理解を深めていくまでには、段階的に指導をしていく必要があり、個に応じた指導の過程や評価の場面を大切にしたいと考える。

国語でも算数でも児童の理解程度は、常に様々な学習活動の中で変容していくものである。つまり、多様な学習活動を通して児童の学びが深まり、理解の程度が高まるものと思う。そこで、児童の変容を観察し、めあてに沿った活動がなされているか確かな評価を行い、個に応じた手だてを工夫しながら、指導していくことが大切である。そこで、目標と指導と評価の一体化をイメージした授業を心掛けている。

(3) 研究の成果と課題

① 成果

- アンケート結果から、国語好き、算数好きな児童が以前より増えてきた。「わかる・できる」喜びや学ぶ楽しさを味わい、意欲的に学習に取り組める児童が増えてきた。
- 音読、漢字、計算については、計画的に指導し、繰り返し学習を続けてきた成果がでてきている。特に、読書については、進んで本を読もうとする態度が身に付いてきており、わずかな時間を利用して読もうとする児童も増えてきている。計算についても、意欲的練習し、自信を持って取り組める児童が増えてきた。
- 評価チェックリストなどを活用し、評価を基にした指導の手だての明確化を意識することで、より児童一人一人の実態に応じた支援ができるようになってきた。
- 算数では、単元の系統図を作成したことで、各学年の学習内容のつながりが明確になった。このことにより、次学年へのつながりを意識して授業をするようになった。
- 算数では「学年に応じたノートや記号の書き方」「算数用語集」、国語では「おたすけブック」などの教材を開発し、活用することができた。
- 個に応じたきめ細かな指導を行うために、児童の実態や各教科のねらいや内容に応じて、習熟度別学習や少人数指導などの授業形態を工夫し、指導にあたることができた。
- 国語、算数部の指導に関する面だけでなく、企画・調査部、学習環境整備部、情報・連携部など、各部が計画的に実践し、実態把握や研修の充実、学習環境の整備、地域との連携などの面で成果が上がってきた。

② 今後の課題

- 国語、算数科を中心に更に基礎学力の向上を図り、すべての児童が「わかる・できる」喜びや楽しさが実感でき、「国語好き」「算数好き」になるように研究を進める。
目標と指導と評価との一体化を図るために、特に評価計画や評価方法などを見直し、確かな評価ができるように研究を深めていく。
- 評価を見直し、補充的な学習や発展的な学習を検討していく。
- 「学力向上フロンティア」に関する取組について、保護者や地域の方々との情報交換の場を多く設定し、連携を図っていく。
- 二学期制の導入と共に、教科担任制や時間割、日課などを工夫して、更に教

育課程の改善を図る。

- マルチメディア学校間連携推進事業推進校として研究してきたことを生かし、更に教科・領域の学習の中で情報機器を効果的に活用し、確かな学力の向上が図れるように工夫していく。

(4) 研究成果の普及の方策

- ① 授業研究会（公開）の実施
 - ・平成15年6月23日
 - ・平成15年11月27日
 - 対象 普及地区（石橋町，壬生町，国分寺町，都賀町）の小学校，下都賀地区の中学校
- ② 学力向上推進委員会への参加
 - ・平成15年12月9日 下都賀地区学力向上推進委員会 場所：下都賀庁舎
 - 対象 下都賀地区フロンティアティーチャー
 - ・平成15年12月12日 学力フロンティア事業研究協議会 場所：とちぎ青少年センター
 - 対象 県内フロンティアティーチャー
- ③ 来年度の予定
 - ・平成16年12月予定 研究発表会
 - ・平成17年1月予定 石橋町教育会研究発表会
- ④ 研究成果普及のためのHP作成
 - ・HP公開 <http://ishisyo.ishibashi-machi.jp>
- ⑤ 研究成果普及活動の成果
 - ・幼保小の連携・・・幼稚園や保育園にも年間6回授業を公開した。
 - ・町内小中学校への授業公開と研究紀要の配布・・・町内の小・中学校へは校内研究会をすべて公開したり研究紀要を配布したりして、研究の普及に努めている。

(5) その他

- ① 交換授業や教科担任制の工夫とT・T教員との連携
- ② 学習習慣を身に付けさせる指導
 - ア 朝の活動「ぐんぐんタイム」や放課後の補習の時間の位置づけ
- ③ 家庭や地域との連携を図る工夫
 - ア 学校日より，学年日より，フロンティア通信の発行
 - イ 授業参観，懇談会の実施
 - ウ アンケートの実施（保護者対象）
 - エ ホームページの公開
- ④ 情報機器を効果的に活用する工夫
- ⑤ 実態調査，意識調査の実施（児童，教員対象）
- ⑥ 研修の充実
 - ア 授業研究会，実践レポート報告会の実施
 - イ 研修会の実施

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
- 13～18学級 19～24学級
- 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
- 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
- 生活 音楽 図画工作 家庭
- 体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無

【特色ある取組事例として紹介したいポイント（都道府県教育委員会記入）】

指導計画に評価規準や評価方法等を明確に位置付けることはもちろん、日常的にそれらを見直したり、評価の時期や評価後の手だて等を事前に十分イメージした上で授業を展開するようしたりするなど、指導と一体化した、生きた評価を積み重ねてきている。